講堂の中：立体曼荼羅

講堂は、説教やマントラ詠唱を聞くだけの場所ではなかった。建物自体は禅定のツールとして設計されている。内部の 21 体の佛像は、密教の神聖な宇宙論を描写した立体曼荼羅を形成するように配置されている。

15 体の佛像は 9 世紀初頭に制作された。空海（774–835）が東寺の別当の間に彼によって伝統に則ってデザインされ、講堂には 839 年に安置された。残りの 6 体は、1491 年の講堂の再建後に作られた複製品である。すべての佛像は木と漆で作られており、そのほとんどが金箔で覆われている。

佛像はグループ分けされている。6 つの付随的な神々に囲まれた 5 つの神々のグループが 3 つ存在する。中央の須弥壇には、五智如来が安置されている。五智如来は完全に悟りを開いた日本の佛教殿堂の最高位の存在で、人々を教え導く佛である。東には、人々が悟りを開けるように手助けを行う優しさを持った五大菩薩が安置されている。西には獰猛な見た目を持ち、邪悪な者を懲らしめ、信心深さを持つ者を導く五大明王が設置されている。須弥壇の四隅に立っているのが、四方を守る四天王の一尊である。両側に立っている仏陀の世話役である梵天と帝釈天は、ヒンドゥー教の神々から佛教の神話に組み込まれた。梵天は東側、帝釈天は西側に立っている。